

高月凱士さんの一日

高知大学

人文社会科学部 人文社会科学科
社会科学コース 3年生

たかつき かいと

高月凱士さん

岡山県出身。高校時代から選挙啓発活動に参加。大学では野球部に所属し、選手としてプレーするだけでなく、大会運営にも携わるなど幅広く活躍している。

授業がある日		授業がない日	
9:00	起床	8:00	起床
9:00~10:30	準備・移動	8:00~9:00	準備
10:30~12:00	2限	9:00~13:00	カフェで作業
12:00~13:10	昼食	13:00~17:00	バイト①
13:10~16:30	授業	17:00~18:00	移動
17:30~21:30	部活	18:00~22:00	バイト②
21:30~24:00	友達とご飯	22:00~24:00	帰宅・入浴
24:00~25:00	帰宅・入浴		



インタビューを通して、彼は人文社会科学部の魅力として「幅広い分野を学べること」を挙げている。三つのコースに分かれているものの、他コースの授業も履修しやすく、自分の興味や関心に合わせて学びを広げられる点に魅力を感じているという。また、学生数が多いため交流の機会も豊富で、多様な価値観に触れながら学べる環境も人文社会科学部ならではの特徴だと語った。さらに、新しく整備された人文棟の快適な学習環境も魅力の一つだという。

一方で、専門分野をより深く追究しようとする、学びの方向性によっては課題を感じることもあると語る。しかし、それ以上に幅広い学びの中から自分の興味や可能性を広げられる点こそが、人文社会科学部の大きな魅力であると感じているようだった。

学生目線で見る

人文の魅力

選挙啓発活動

への挑戦

彼は現在、大学生活において、若者の社会参画を促す団体「Our Note, Our Voice」（以下ONV）での活動に力を入れている。ONVは、選挙啓発や若者が社会について考えるきっかけづくりを行うサークルであり、若者世代と政治や社会をつなぐ架け橋となることを目指している。大学入学後、授業で選挙管理委員会の方々と関わる機会があり、ONVへの参加を勧められたことをきっかけに活動に携わるようになった。当初想像していた大学生活とは異なる挑戦だったが、「やるからには頑張ろう」と思っている」と前向きに取り組んでいる。

彼がこうした活動に情熱を注ぐ背景には、高校時代の経験がある。当時、地域のコーディネーターとの出会いをきっかけに選挙啓発活動に参加し、町の選挙管理委員会と協力して、期日前投票について学べる〇×クイズ動画を制作した。企画からイラスト作成、撮影、編集まで自ら手がけ、動画は投票所やケーブルテレビで放映された。しかし、その取り組みが投票率向上へ十分つながったとは言えなかった。

その経験から、知識を伝えるだけでは若者の投票行動を促すことは難しく、高校生のうちから実践的な選挙体験を積むことが重要なのではないかと考えるようになった。そこで彼は、生徒会選挙を実際の選挙に近い形に近づけようと試みた。期日前投票の導入や政見放送の制作を主導し、課題の発見から解決策の実行まで主体的に取り組んだ。課題を見つめるだけで終わらせず、具体的な成果へと結びつける行動力は、彼の大きな強みである。高校時代の経験を通して育まれた「若者と社会をつなきたい」という思いが、現在のOVの活動の原点となっている。

今後は、OVに所属することで得られる価値をより明確にしていきたいと考えている。

メンバーが企画や運営を通じて得た経験や学びを団体へ還元し、好循環が生まれる組織づくりが目標だ。

「みんながOVを自分にとって価値のあるものとして活用し、それをOVにも還元してほしい」。

個人と組織がともに高め合い、成長できる環境をつくりたい

—— そんな思いが、その言葉には込められている。

選手と裏方の

一二刀流

さらに、彼は小学校から続けている野球にも力を注いでいる。野球部では選手としてプレーするだけでなく、運営側としても重要な役割を担っている。現在は四国地区の学生委員長として、大会の組み合わせや日程の調整、球場の手配などを担当している。また、全日本大学軟式野球連盟では学生副委員長を務め、全国大会の運営や各地区が抱える課題について話し合うなど、幅広く活動している。

活動を通して、文章作成能力や外部の関係者との連絡・調整力など、社会に出てからも役立つ実践的な力を身につけたという。

また、多くの人と協力しながら大会運営を進める中で、責任感やチームワークの大切さを学んだ。こうした経験は、野球という枠を超えて自身の成長につながっており、将来の仕事や社会生活においても大きな財産になると感じている。



『得意』を

武器に

また、後輩へのアドバイスとして、「自分の得意を伸ばすことが大切」だと語っていた。苦手を克服する努力も必要ではあるが、自分のタイプに合ったことを見つけ、それを伸ばしていくことも大切だという。実際に、自身は裏方の仕事で自分に合っていると感じており、「裏方の仕事を頑張ってきてよかった」と振り返っていた。

さらに、勉強と部活動の両立については、「文武両道は車のようなもの」と表現した。勉強と部活動、それぞれのバランスを取りながら、回転数を合わせるように熱量をそろえることで前に進むことができるという。後輩に向けて、「勉強もしっかり頑張っていてほしい」とメッセージを送っていた。

編集後記

取材を通して、選挙啓発活動や野球部での運営など、それぞれの場で主体的に行動し、課題解決に取り組む姿が印象的であった。高校時代の経験を起点にしながら、大学ではより広い分野へと活動の幅を広げている点に、人文社会科学部ならではの学びの柔軟さや可能性が表れていると感じた。

また、学びと課外活動を行き来しながら、自分の役割を見つけ成長していく姿からは、同学部が持つ「自分の関心を軸に学びを広げられる環境」の特徴がうかがえた。今回の取材は、人文社会科学部の学びの在り方を具体的に理解する貴重な機会となった。

人文社会科学部二年梶原こころ

二年眞鍋花梨

二年村上実莉

